

## 第1回 “犬の飼主検定” 開催!



### 混合ワクチンは1年に1回必要なの?

あなたは犬のことをどれくらい知っていますか?  
あなたは犬の飼主として合格ですか?

平成20年3月2日(日)  
犬の飼主検定(動物愛護社会化検定)が全国6都市で行われます。

犬の飼い方、世話の仕方、メディカルケア、関連の法規、マナーやルールなど飼主が知っておいて欲しい事を検定問題として出題するようです。受験資格は問わず、どなたでも受けることができるそうなので、皆さんも受けてみてはいかがでしょうか?

受験の申し込みは平成20年1月31日まで(受験料3,000円)。

詳しくは<http://www.happ.co.jp>をごらん頂くかHAPP特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会 TEL 056-6971-1162にお問い合わせください。

最近、犬・猫のフードにとっても大きな変化がありました。今までは「長生きさせたらかったらドッグフードやキャットフード以外の物をあげてはいけません!」こんなふうに使われていたと思いますが、この1~2年でドッグフードやキャットフードの添加物や原材料の不安など問題点が多く「健康を考えるなら手作りごはんや生食(肉などを生のまま与える)が良い!」と言われはじめました。考えて見れば、もとは肉食や肉を中心とした雑食の動物達ですので、その本来の食事に近づけるのがベストなはず。また、何が入っているかわからないフードより、自分達で材料から用意できる手作りが安心できるなどから、隣のショップでも、手作り食用の素材や素材を吟味した手作り風のレトルトフード、生食といわれるお肉のパテが良く売れています。またドライフードでも内容が大きく見直され、今までの穀類中心のフードから穀類を使用していないフードへと変わってきました。私達もこの大きな変化に遅れないよう勉強し、情報収集し、試し、皆さんにアドバイスできるようにしています。もし、食事の事でご相談がございましたらお気軽に声をかけてください。

今年も残り1ヶ月となりました。この時期の一大イベント!? 大掃除がありますね。どんなにきれいにお掃除しても、ペット飼っていると犬臭くないかしら?・・・オシッコ臭くないかしら?・・・など気になりますよね。そんな時試してみてください!!!

匂いの気になる部屋の中で緑茶の葉を煎ると、匂いが消えます。お茶の葉には強力な消臭効果があり、即効性があるので急なお客様の時に助かりますよ。我が家も早速、試してみようと思っています。

最近、インターネットなどで『ワクチンは3年に1回の接種で良い』という事が言われているようです。では、本当に3年に1回で大丈夫なのでしょう?この3年に1回で良いという根拠は、米国の獣医内科学学会で「ワクチンは3年に1回の追加接種で良い」という指針が出たからなのです。しかし、これはあくまで米国における指針であり、そのまま日本に当てはまるかという大きな疑問があります。その訳は、米国と日本では動物の飼育環境に大きな違いがあるからです。その1つは混合ワクチン接種率の違いです。米国では80%の犬猫がワクチンをきちんと受けています。これだけの接種率だと「集団免疫」という考えが成り立ちます。仮に病気が発生しても拡大せず病気は終息してしまいます。(この考えは日本では狂犬病予防注射に取り入れられ、病気の発生が無くても毎年狂犬病予防注射を受けなければならない理由となっています。)しかし日本での混合ワクチン接種率はどうでしょう?わずか20%に過ぎないのです。米国と日本ではこれだけの差があるのです。

また、日本での伝染病の多くは、ペットショップやブリーダーの所で感染しています。ここでの飼育環境の違いも大きいと思います。その他、いろいろな面で米国と日本ではかなり大きな違いがあるのです。

そして、この学会の指針では3年に1回の接種で良いための条件を出しています。

ワクチンは世代の新しい生ワクチンを使用し、初年度は3週間隔で接種を行い、最後は生後12週齢以降に接種する事(例、1回目:生後8週齢、2回目:生後11週齢、3回目:生後14週齢など)。

そして、その1年後に追加接種をすること。これだけの条件を整えば日本でも3年に1回の混合ワクチン接種で大丈夫と言えますが、米国がそうだからと、今の日本で3年に1回の接種にするのはあまりにも危険だと思われます。

ちなみの日本で発売されている混合ワクチンの多くは世代の古いもので、2社のみが世代の新しいワクチンです。(当院では世代の新しいワクチンを使用しています。)これらの事を考えれば、今の日本では今まで通り1年に1回の追加接種を行うほうが安心だと思われます。

## 病気シリーズ

### クッシング症候群（副腎皮質機能亢進症）

犬および猫には下垂体・甲状腺・副腎・上皮小体など様々な内分泌腺があります。これらの内分泌腺のうち副腎皮質からのステロイドホルモンであるコルチゾールの分泌が増加し、慢性的に過剰になる病気をクッシング症候群（副腎皮質機能亢進症）といいます。犬に多く、猫ではまれです。

#### 原因・・・

多数ある内分泌腺のうち下垂体もしくは副腎の異常によって起こります。最も多い原因は下垂体の腫瘍で、クッシング症候群のうち80～85%を占めます。このタイプのものを下垂体依存性副腎皮質機能亢進症といいます。下垂体が腫瘍化することで副腎皮質刺激ホルモンが分泌されるため副腎からのコルチゾール分泌も過剰になります。もう1つのタイプは副腎腫瘍性で副腎そのものが腫瘍化することで、全身的なコントロールから独立して過剰なコルチゾールを分泌します。

#### 症状・・・

クッシング症候群の症状は様々ですが、最も多くみられるのは、多飲・多尿・多食です。その他、腹部膨満・筋力低下・皮膚菲薄化・脱毛・無気力・膿皮症・パンティング（安静時でもハアハア呼吸する）などがあります。また二次的に肝機能障害や糖尿病・腎盂腎炎などの病気を引き起こします。

#### 診断・・・

診断には通常の血液検査に加えてACTH負荷試験という特殊検査をすることで診断します。また、エコー検査で直接副腎の大きさを評価し、その他の検査と総合的にみて診断します。

#### 治療・・・

クッシング症候群の治療は原因によって異なります。下垂体依存性の場合、手術による下垂体切除は殆ど実施されておらず、通常は内服薬で副腎からのコルチゾールの分泌を抑制する治療をします。副腎腫瘍性の場合、切除可能であれば手術が第一選択になりますが、手術および合併症のリスクはその他の手術に比べて高くなっています。手術を選択しない場合や手術不可能な場合は、下垂体依存性と同様に内服薬での治療となります。

## 『ドッグマンス』

### あなたの側にいる犬たちのことを考える1ヶ月

人と犬がより良く共生できる街づくりを目指し、毎年11月に福岡県各地でキャンペーンイベントが行われます。今年も「犬との生活の楽しさ」「しつけ」「飼主のマナー」「犬に関する様々な問題」などを知らせてもらうため各地でイベントやセミナーが行われました。

犬猫の殺処分頭数が日本一多い福岡県。犬猫を手放す理由は「たくさん生まれたけど、これ以上飼えない」「近所から苦情が出た」「転居」「咬む」「飼主または犬猫が病気になった」など。このうち新しい飼主のもとへ行ける子達は極わずか。ほとんどが『処分』されているのです。こんな悲しい現実を知り、一人一人が出来る事から行動をおこしましょう！・・・というのが

『ドッグマンス』です。

当院ではこの活動をたくさんの人に知らせてもらうこと、ここから始めようとステッカーの販売やガイドブックの配布、お散歩時のマナーとして、ウンチくんの持ち帰り&おしっここの処理を呼びかけています。11月は終わりましたが、この気持ちと活動は継続していくことが大切だと思っています。皆さんもできる事がありません。まず、この大切な家族を最後まで責任持って面倒を見てください。そして、この家族が嫌われないようにしつけをし、マナーの良い飼主になってください。安易にペットを飼い、安易にペットを捨てる飼主が増えないように、ペット飼う事は大変あるという事を、これから飼主になろうとしている人達に伝えてください。



## ドッグドック・キャットドックを終えて

当院では今年10月・11月にドッグドック・キャットドックを実施しました。今までもフィラリア検査時やワクチン時に血液検査を実施していましたが、血液検査だけではわからない病気も多く、飼主さんからの要望もあったため、今年からドックを実施する事となりました。ドックは半日お預かりして、血液検査・レントゲン検査・エコー検査・心電図・血圧測定・眼科一般検査・身体測定など各種検査を行いました。



一部の興奮したワンちゃんでは血圧測定ができなかった場合もありましたが、全体を通して特に問題なく検査を進めることができ、今回のドックで飼主さんも気づかなかった病気（膀胱炎や高血圧など）も見つかりました。発見された病気もまだ症状がでる前だったので、ワンちゃん・ネコちゃんにストレスなく治療をはじめることができ良かったと感じました。近年、高齢のペットが増え、人間と同様に様々な病気が出てくる可能性があります。治療できる病気は出来るだけ早期に見つけてあげたいものです。